

のイエスとの邂逅であった。ワイルドは、自分の資質にふさわしい出会いをしたわけである。

ワイルドの生涯と著作における書簡の位相

西村孝次

(協会顧問・元明治大学教授)

イギリス人は気違いじみるくらい手紙好きである。イギリスの作家は近代から現代にいたるまで実におびただしい量の書簡を書き残している。

ひとつの例を挙げれば、ジョン・キーツ (1795—1821) であって、弟のジョージとトム、妹のファニーをはじめ、恋人のファニー・ブローン(39通)、友人のシェリー、リー・ハント、画家のベンジャミン・ヘイドンやジョウゼフ・セヴァーンその他に宛てて多くの手紙を書き送った。それらは、フォーマン兄弟の『ハムブステッド版』(1938)によって集成され、さらにロリンズにより補完された(1958)。キーツの手紙について、T. S. エリオット (1888—1965) は「かつていかなるイギリスの詩人の書いた手紙のなかでもっとも注目すべき、またもっとも重要なもの」とさえ激賞した。

そのエリオット自身が、今世紀における「もっとも注目すべき、またもっとも重要な」手紙の書き手として、D. H. ロレンス (1885—1930) と双壁になろうとしているのであるが、ワイルドの『獄中記』は、こうしたイギリス書簡文学の系譜のなかで捉えられてこそ、初めてその真価を認められるのである。

すくなくともこの手記がロバート・ロス (1869—1918) の善意による削除版としてとどまる限り、それは一種の信仰告白として読まれたのみでなく、またそういうものとして喜ばれてもいた。ところが1962年、ひとりの出版者・伝記作者ルーバート・ハート・ディヴィスがこれの完本を編集・刊行するに及んで、これがほかならぬアルフレッド・ダグラス卿(1870—1947)への奇妙な異常な長文の私信であることが判明し確認されたのだった。したがって、わたしたちは、今日、これを言語に絶する快楽と呪詛と悔恨と希望の錯綜する書簡文学のひとつとして読むようになったわけである。しかもこれは、さきのキーツの手紙が、ある意味でかれの自身の詩とその時代の貴重な註釈であったように、『獄中記』はワイルド自身の作品と19世紀という特定の時代と社会についての独特の評釈となっている。

もし、かりにワイルドの一生を創作と批評と手紙との時代という三期に分けるとすれば、出獄してからのワイルドは、C. C. 3. という囚人番号によってしか発表できなかった『レ



ディング牢獄の唄』を唯一の例外として、ただ手紙を書きつづけたままで、パリの安宿で窮死するほかなかった。それは、いわば、『獄中記』のあとをうけての悲惨な、だがリアルなアンティ・クライマックスだったのである。

Wilde 劇の女たち

河内恵子

(慶応義塾大学助教授)

Wildeはさまざまな個性を創造した。男、女、子供、動物、植物といった個性は、さまざまな文学ジャンルにおいて Wilde の内的世界を語り続けている。これらの個性の中から女を、そして、文学ジャンルからは演劇を選んで、両者の関わり合いを見つめ、ひいては、劇作家 Wilde の技の一端を考えてみたい。

演劇以外の文学ジャンルにおいて、女たちの言葉はきわめて少ない。また、彼女たちが担う役割も、男たちのそれと比較すれば、重要度の低いものである。しかし、戯曲においてはどうか。事情は一変する。鋭舌な女たちが演劇空間を独占しているのだ。

初期の作品である *Vera, or the Nihilists* の主人公 Vera は革命の必要性を熱情を込めて語りもすれば、恋人 Alexis への思いの丈を率直に伝えもする。同じく初期の悲劇である *The Duchess of Padua* の主人公 Beatrice も言葉を尽くして自らの思いを表明する。貧しい者たちへの共感の情を素直に表現する言葉も持っていれば、恋人 Guido Ferranti に対する激しい思いを伝える術も持ち合わせている。詩劇 *Salomé* は、これら二作品よりずっと後に書かれた作品ではあるが、主人公 Salomé も Vera や Beatrice に負けず劣らず、よく喋る。命令、哀願、拒絶——ありとあらゆる言語操作の術を余す所無く披露してくれる女である。

しかし、Vera も Beatrice も、そしてまた *Salomé* も、自らの思いを言葉を尽くして語ってはいても、自分以外の他の女と言葉を交わすことをほとんどしない。内なる思いを独白したり、男への愛を告白したり、演説口調で己の死生観を表明することはあっても、同性の友との、あるいは同性の敵との対話を経験することはない。

Vera や *The Duchess of Padua* を執筆していた頃の若き Wilde には一作品において複数の女を描き出す技が備わっていなかったのかもしれない。また、一幕劇という限られた条件の下では、*Salomé* という一人の女の個性に重点をおいて創作せざるをえなかったのかもしれない。唯一人の女に焦点を当てて書きたいという願いが Wilde の心の内に

あったのかもしれない。意中の女優を際立たせる劇を創作したいという思いに駆られていたのかもしれない。さまざまな推測が成り立つ。しかし、「女同士の対話」を経験しない鈍舌な女の生き方こそが Wilde が描いた悲劇世界の底辺をなしていることに間違いはない。

後期に書かれた四作品、*Lady Windermere's Fan*, *A Woman of No Importance*, *An Ideal Husband*, *The Importance of Being Earnest* に登場する鈍舌な女たちは、前述の三編の悲劇作品の女主人公たちとは異なり、「女同士の対話」を通してその強かな生き方を見せている。*Lady Windermere's Fan* を例にとって考察してみたい。

‘innocence’を体現する Lady Windermere と ‘experience’を体現する Mrs Elynne —「母を失った娘」と「娘を棄てた母」とが織りなす相剋と和解とを軸に展開されるこの作品は「自己発見」をテーマとしている。Lady Windermere は苦い体験を通して妥協を許そうとしなかった自らの ‘innocence’ が ‘ignorance’ そのものであったことを悟り、母の Mrs Elynne は「棄てた娘」を救うことによって自らの内にある ‘innocence’ を知り、‘experience’ と ‘knowledge’ に裏打ちされたほんものの ‘higher innocence’ を手に入れる。それぞれに「自己発見」を遂げる母と娘は、自らの考えや思いを「対話」を通して語る。それは、Vera や Beatrice や Salomé の独断的な「人生の主役は私ひとり」という語りではなく、自分自身の思いを言葉に託しながらも、他者の、すなわち他の女の言葉を理解する対話の語りである。

Mrs Elynne と Lady Windermere という緊張した母娘関係と対照的に描かれている母と娘が The Duchess of Berwick と Lady Agatha Carlisle である。Gossip しか話さない母と、母の命令に “Yes, Mama” としか答えない娘との緊張感の欠如した関係は、主人公の女たちの緊迫した関係を逆説的に補強し、且つまた、舞台空間に、やわらかな、弛緩した雰囲気をもたらす役割を果たしている。Gossip もまた重要な女の言葉なのだ。

手紙もまた一種の「対話」手段として、きわめて効果的に用いられている。娘の窮地を Mrs Elynne は、彼女の書き置きを偶然読むことによって知る。「手紙」という表現手段が手紙を書く女 (=Lady Windermere) と手紙を読む女 (=Mrs Elynne) を結び付け、対決させ、和解へと到る道を準備する。手紙もまた、作品を展開してゆく上で重要な手段、すなわち、女の言葉となっている。

緊張を強いる女同士の対話、緊張を弛緩させる女同士の対話、Gossip や手紙という表現手段——劇作家 Wilde の技の冴がはつきりとあらわれているのではないか。

この技は他の喜劇作品においても繰り返し使われるが、Wilde の最後の戯曲にして、English farce の最高傑作と称される *Lady Windermere's Fan* においては、一層の磨きかけられ、Gossip を語る女の他に dandy として生きる女、手紙を書くかわりに未来

の出来事を日記に記す女などが登場してくる。舞台は緊張と弛緩を繰り返す、過去、現在、未来という時間軸は自由に動かされる。さまざまな語りの芸を披露している。

一人の女だけに語らせていた Wilde の姿はもはや見られない。‘innocence’ な劇作家は「語りを知る」という ‘experience’ を通してその技を比類なきものにしたのである。「対話」する鈍舌な女たちを描きえた時、Wilde は、「語りの喜劇」を確かに創り出したのである。

短篇『謎のないスフィンクス』論考

——「神秘」への誘いと言語操作について——

梅津義宣

(尚絅女学院短期大学助教授)

文学の世界について、特に「小説」のジャンルに関して、短篇の構成や文体が長篇のそれと根本的に異なっている点がある。それは、長篇の場合には、そのうちに読者の興味を惹くことができるが、短篇の場合は、いかにはやく読者の興味を惹くか、また、読者の興味をどこに集中させるかという点が重要な鍵となる。

ところで、ワイルドの芸術観を窺う上で重要な手掛となるキーワードは、「形式」「選択」「制約」「強調」「誇張」というような言葉である。これらのキーワードを基とするワイルドの作為性が、他のジャンルもさることながら、とりわけ彼の短篇を構成する上で効果的な支柱となっていることに注目したい。このような、ワイルドの短篇の劈頭から結末に到る完璧なほどの作為性を具備した言語操作を、「言葉（あるいは言葉の組み合わせ）を文学の根底に据えたエドガー・アラン・ポーの詩論（『構成の原理』等）」の影響と見ることは、ワイルドとポーとの関わりを深くたどれば自ずと明らかなことである。

力強いインパクトをもって読者を「神秘」の世界へと巧みに誘う言語操作を、ワイルドの代表的短篇の一つである『謎のないスフィンクス』を通して分析してみたいと思う。

まず注目すべき点は、本短篇の劈頭部分である。「エッチング（銅版画風に）」というサブタイトルがそれを示唆するように、書き出しの文章は、四つの「-ing形」が反復して用いられ、爽やかに流れるような文体で叙述される。セーヌ河畔に位置する喫茶店「平和」の外に腰をかけてベルモット酒を飲みながら眺める光景は、パリに住む人々の “the splendour and shabiness” であり、また “the strange panorama of pride and poverty” であって、これら二つの光景は互いに平衡の関係を形成している。またここで